

るといえる。またその仮定が願望である限り、島木の「思想」は表面化されないのである。「盲目」で作者はいう。生きていく人間が死の状態にまでつきおとされ、しかもなほ生きて行かねばならぬとしたならばこの問いこそ「癩」「盲目」を一貫して流れる主題である。「獄」は、権力の強制・圧迫の最大の武器であると共に、社会からの完全なる孤立を可能にさせる恐るべきものである。

「癩」「盲目」等、一連の監獄もののテーマ——転向の問題は、思想的には考察され得ずに、「階級の信念を環境に強いられてすすんでいく余儀なく」させたものへの反発と、島木自身の内部に潜んでいる非転向者への倫理的負い目の解消へと追い出されてしまった感がある。

第二章 「再会」と「再建」

昭和七年、二十九才の時、島木健作は仮釈放となり、翌年農民運動史を書くために、香川時代の農民運動の資料収集を始める。だが転向問題が根底にあり書き進めることができず、その解決を農民運動への復帰に求めたとたん再び病に倒れてしまふ。島木は「死ぬかも知れない」という恐怖と「文学的な表現で何か書いて見たい」という焦躁とに駆り立てられ、その時一気に書いたのが「癩」である。この「癩」そして「盲目」の執筆が島木にとって転向を強制させたものへの反発と、転向者としてのコンプレックスへの救済の役目を担うものとして一応のピリオドが打たれてか

転向作者としての島木の最大の業績はいうまでもなく「再建」である。これは、昭和六年秋から九年春までの組織破壊後の香川県の農村及び農民の実態と、三・一五事件により検挙され、獄中にある農民運動家の生活等を相互に描いた長篇である。主人公には、前者の現実的実践場面を山田春乃が代弁し、後者の理念的場面を浅井信吉が代弁するものとして設定してある。この二人は、浅井による、かつての組織と運動方針への批判を踏まえた上での組織の再建志向が、春乃を通して現実の生活面で探られていくという点から、理論と実践の相関的役割を演じているといえるだろう。ここで浅井の組織及び運動方針への批判というのは、組織の中心を成していたのが、いわゆるインテリ出の組合書記であったために、運動方針が農民大衆の現実的要求と遊離したところで進められていたことの指摘である。このような浅井の批判と組織再建への具体的手段は春乃を通して忠実に移されて行くのだが、「再建」には現実的実践という意味において春乃と同じ位置にある谷川清吉という人物が登場する。谷川清吉は、旧農民組合の幹部で、組合運動の高揚期には保守的で中間派的立場をとっていたが、組合壊滅後は農民の現実的な指導者として部落の日常生活において世話役の仕事をしている。谷川は、大地主でナチズムの信奉者である松崎真次郎が設立した農民興国会に参加し、そこに集約された農民を逆に再組織することに力運動の再建を考えているのである。そのうち興国会の農民の間に「誰が煽動するでなく申合せもない」のに自然発生

らは、やはり当初抱いていた「転向問題」の解決を農民運動の実践によつて成し遂げる決意を実行に移さなければならなかった。こうして結実した小説が処女長篇「再建」である。その「再建」への準備段階として、革命的視野に基づいた農民運動批判の姿勢を確立させた「再会」という短篇がある。これは、出獄後進歩的なインテリとしての仕事に従事している私が、五年ぶりに出獄してきた同志木村信吉と再会し、木村が合法的に農村に居住し大衆の中に沈潜した農民運動をやり始めたことを聞くという内容である。この「木村」なる人物が、日農香川県連で島木と共に活動し、三・一五事件で検挙された「官井進一」であることを最初につきとめ、島木健作の転向の位相を分折したのが大久保典夫氏である。氏は「倫理的には島木の転向意識の対象は官井進一ただ一人かもしれないと述べ、官井が合法的に香川に居住したことを聞くに及んだことで、「島木は、自己の運動批判にともなう倫理的負い目を払拭し、革命運動の批判の観点を定立したのである。」という見解を示しておられる。つまり、島木はかつて実践に携わっていた時期に、革命運動が農民大衆と遊離したところで性急に進められていく状態にある程度の眼を持つてはいたのだが、農民運動家としての敗北意識のために、具体的な農民運動家への展望を確立しえなかつたのである。ここにおいて島木は官井と「再会」することにより、沈潜していた転向者としてのコンプレックスを払拭し、革命的視野に基づく運動批判の姿勢を確立したのである。

的に対地主との抗争意識が萌芽する。こうした農民の意識の高揚は結果として、中間派的立場を固守していた谷川を最左翼へ押しやることになるのである。谷川は春乃と手を組み、小作人大会を企画するが、その運動が自然発生的であったにも拘わらず、当時の左派組合である全農全国会議派がとつていた農民委員会運動と段階的に照応し弾圧されることになる。谷川と春乃は検挙され組織再建への道は断ざされてしまふ。

島木は、谷川や春乃という先進的な農民を設定することにより、左翼思想家に啓蒙されない所での農民自身の手による自然発生的な運動の高揚に、真の革命運動への方向付けを示唆したのであろう。だが結局谷川も春乃も組織の再建を可能にできなかったとしたのは島木がこの作品に当然受ける弾圧を予期したからで、島木はぎりぎりの合法性をもつて慎重にこの作品を書いたと思われる。

平野謙氏は「再建」の価値を次のように評しておられる。その主題の一つとしてえらばれるものは、日本の革命運動そのものの批判にほかならぬ。農民の生活を土台として、現実密着からする革命運動の観念性の批判という困難な主題に、作者は取り組まざるを得なかつたのだ。…略：私は「再建」をわが転向文学の異色篇として高く評価したいと思う。

このように「再建」の主題は、革命運動の批判という転向文学史上稀な意義を持つものであり、またそれ故に左翼意識を煽るものとして発売後わずか十日程で発売禁止処分を

受けてしまふのである。島木は発禁処分にあつたことで、「再建」の第二部で主人公の出獄後の転向問題が取り上げられる筈であつたがその機を失つたことを残念に思ひ、と述べている。果たして島木は、主人公浅井信吉の転向問題をどのように描くつもりであつたのだろうか。この疑問には大久保氏をはじめ「再会」の木村信吉のモデル官井進一の出獄後の生活から推理し解答を与えている。つまり「再建」は、官井進一の村や部落における生活記録を元に書かれたものであり、その事より推測できることは、浅井もまた官井と同様に大衆に密着した形で農民運動を實踐に移して行くだろうということである。なお、その後の官井は、一貫した農民運動家として活動を続けている。島木と思想的交渉があつたのは、おそらく「再建」までであり、発禁後しばらくして島木は自ら官井との交際を断つてゐる。このことは「再建」以後の島木の作品の内容を決定付ける一つの要因となつた。

第三章 「再建」から「生活の探求」への移行

「再建」発禁後わずか四ヶ月の月日を経て発売されたのが第二の長篇「生活の探求」である。「再建」が、組織破壊後の香川を舞台に組織と運動方針の批判を主軸に据え、また一方には組織再建の願いを込めて書かれた作品であつたの比べ、「生活の探求」は、革命運動を背景にした農民運動の視点から完全に脱却したところで、抽象的に更に宗教的に、人間の生き方を模索しようとした作品である。こ

転向ということが、単にある政治上の主義や、政治的な組織からの離脱といふやうなことではなくて、さらに深い人間の精神の問題であること、それは求道の過程そのものであること、その意味において、それは一生の事であることを、真に深く自覚したのは、「生活の探求」においてであつた。

ところで、「再建」から「生活の探求」への移行に見られる転向の問題について、これまで大きくわけると二つの見解が論じられてきた。ひとつは退行ないしは現実への屈伏とみる見方である。これは、島木の再転向という名で評価され、「癩」から「再建」までの思想傾向が「生活の探求」に至つて、また新しい思想へと転向したことを指している。二つ目の見方は、「再建」から「生活の探求」への屈折が、現実の農民の外的強制による変化によつてもたらされたものであり、生涯一貫して大衆追随主義者だつた彼の、大衆密着への志向には何らの変化もない、ということである。つまり、「再建」での農民は自然発生的に地主との抗争意識が萌芽し、革命的気運にみまぎつていたが、「生活の探求」での農民は戦時体制の下、非常に倫理的に柔順になることを強いられていた、この農民の変化である。これは「再建」から「生活の探求」への移行をむしろ連続した作品と把える見解である。

私は、この二つの見解に加えて「或る作家の手記」を用いた作者の心理を探つてみようと思ふ。それによると「再建」は作家としての「最初の大きな転向であり、そし

の二作の位相の大きな相違、それが実質二ヶ月というわずかな期間だけの变化だけに、この間には島木の転向の問題が隠されているといえるだろう。

「生活の探求」は、東京での学生生活に疑問を抱き中途で放棄して故郷に帰つた主人公杉野駿介が、農村での厳しい現実をひとつひとつ乗り越え、農民としての自覚を持つて新しい探求の道を発見していく姿を描いた作品で、筋としては非常に簡単なものである。だが、あれ程のベストセラーで迎えられたのは、駿介の農村での生活態度、勤勉実直な生活信条が戦時体制へと着々と歩を進めていく国家の意図により極めて倫理的になることを強いられていた当時の国民の状況を合致するものがあつたからである。駿介の存在は、まさに当時の理想的青年像に価するのである。ところで、駿介は何故東京の大学生活を中途してまで帰農せねばならなかつたのか。そこには、知識階級への批判があるのである。しかし駿介の知識階級批判なるものもインテリゲンチヤの知性の世界を観念的であるが故に否定し、そこにおける苦悩や問題を全く回避した形で、農村での生活の実体の方に、より多くの人間としての価値を見出し、通じる。島木は彼自身の転向問題を以前のよう、知識階級批判をも含めた政治的側面からは考察せずに、人間の倫理性を強調する精神的側面から眺め始めたのではないだろうか。その根拠は「生活の探求」について「の一節に見られる。

て「生活の探求」こそが今まで書かずにはいらなかつた気持の表現されたものであること。更に作品の上だけでなく人生態度の上でも変化しつづつあることを吐露している。例えば「理屈でものをきめてみたことよりも、気持に添ふとか添はぬとか、好きだとか嫌いだとかいふことを尊重したい」と述べている。このように、島木自身に生じてきたこの心情の変化は決定的に作品の位相に投影されたといえよう。この二作の間に横たわる溝に一つの結論を与えるなら、次のようになるであらう。

生涯一貫として大衆密着の志向を持っていた島木が、除々に誠実で真面目な努力主義の姿勢を確立していくにつれて、大衆の動向を社会総体的に把握すべき主体を喪失していったこと。更に、彼の生活態度がそのように変化していったのは、もともとのストイックな性格に加えて、「再建」の発禁、或いは、思想犯保護観察法に代表されるような、生きながらにして思想撲滅を測るべき強制・圧迫があつたこと。この二点によつて集約できよう。時の状況は第二次大戦へと向かうファシヨの荒れ狂つていた時期であつた。そうした暗黒時代にあつて「運命の人」の一節に島木の非痛な叫びを聞くような気がする。

農民の運命をそのまま自分の運命としたいといふ僕の願ひには、慟哭と祈りに似た気持があるといふことを君は感じてくれるだろうか？

あとがき

昭和四年に、島木は獄中において転向声明をした。この要因が、肺患の悪化と大衆遊離が進められてきた従来の革命運動への批判にあることは既に述べてきたが、これは島木の政治的側面からの転向であるといえる。出獄後、島木は文学生として蘇生した。当初文学は第一義の道を模索するための手段であった。それは「巔」から「再建」までの作品によつて形象された。しかし何らかの形で従前の運動に復帰しようとする志向は、おそらく「再建」までで四ヶ月後発表される「生活の探求」は全く異なった位相を呈していた。この二作の間にある変化に、島木の文学的転向がひそんでいると思われる。

島木の農民と運命を共にしたいという願望は、「生活の探求」を境にして顕著になつてきたわけであるが、この運命を肯定する考え方は、「すべてを自然のままに任せる」という「盲目」の古賀の心境に通じるものがあり、早くから島木の思考法の基礎となるものであった。ただ彼の一貫した大衆密着への志向が、大衆の動向を社会総体的に把握すべき主体の喪失を招き始めた時、より明確に作品の間に断層をもたらしたのではないだろうか。そして、彼の政治性を徐々に壊滅させていったのが、一つには「思想犯観察保護法」等々にみられる。網の目のように張りめぐらされた国家の執拗なまでの弾圧にあつたことも忘れてはならない。ただその中であつて、わずか十年の作家生活を、あくまでも誠実に倫理的に生き抜いた島木健作の姿は、確かに

思想家としての弱さを内包しつつも、人間として精一杯生きるといふ肉声を聞くようである。



「虎狩」論 (その一)

—— 作品の構造をめぐつて ——

木村一信

その他に選外佳作として十篇の作品名と作者名とを付記している。中島の「虎狩」はその第八番目に記された作品であつた。

中島敦の作品「虎狩」は、雑誌「中央公論」の昭和九年一月号(第四十九年第一号)における新人発掘の呼びかけ、すなわち「論文・中間物・創作」の原稿募集に応じて書かれたものである。この時の募集は、中央公論社としてもかなりの力を注いだらしく、社長であつた嶋中雄作の「宣言」も付載されている。そこには、「新人出でよ、新人出でよ、今ぞ新人輩出の秋である。」との言葉がみられ、応募者の意気をそそるものがあつた。原稿締切は四月三十日、枚数は四百字詰百枚以内。その結果は、昭和九年七月、「中央公論」臨時増刊・新人号(第四十九年第八号)において、「創作」の応募総数一四五八篇という多数のうちから四篇が当選作として発表された。それは、「断然他を抜」いていと評された島木健作「盲目」、丹羽文雄「贅肉」の二篇と、「兎に角色々な条件を具備してゐる」ところの平川虎臣「生き甲斐の問題」、石川鈴子「無風帯」の四篇であつた。これらの作品は「中央公論」同号に掲載されたが、

中島はこれについて、昭和九年七月十七日付、氷上英広宛葉書において、「虎狩、又してもだめなり。但し何とか佳作と称するところにはひつてゐる。なまじつか、そんなところに出ない方がよかつたのに。すこしいやになる。」と自分の心情を洩らしている。右の言葉のうち、「又してもだめなり」とあるところから、或いは中島はこれ以前にも何らかの原稿募集に応じていたかと推測されるであろう。「虎狩、又しても」ということばを素直に受けとれば、他の機会に「虎狩」を投じたことがあり、その選に漏れたとの意に解される。この場合、「中央公論」に投稿した「虎狩」は、最初に投じた原稿を改稿・手直しした可能性もあると考えられる。また、「又しても」のみに力点をおいた言葉と受けとれば、「虎狩」以外の作品を他の原稿募集に応じ、落選したとの意味になるであろう。この場合は、現在残されている全集収録の作品をみる限り、「昭和七年の